◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第36回／元侍女の回想―「御候所」

Residence of Prince Asaka 1933―

館内、中二階には、かつて「御候所」と呼ばれた和室があります。奥の階段踊り場から奥まった場所にありますが、未整備のため現在は非公開となっています。この部屋は宮邸で唯一の畳敷きで、宮家御家族に仕えていた老女や侍女の方が日中に控えている部屋でした。今回は現在もご長命でお暮らしの元侍女の方からうかがった宮家当時の様子をご紹介いたします。

当時、宮邸西側には渡り廊下でつながる和館があり、仕えていた女性たちが住み込みで暮らしていました。一方、西洋館である宮邸は和服の侍女の方々にはけっして働き易い場所ではなかったようです。

『(和館侍女室)局で一休みしていると「お帰り、還御!」って門番さんから局と御候所に電話がくると、それ!といって迎えに走りました。玄関に出るのは老女さんだけで(私たち)女どもは二階で。お見送りするときも二階から。お出かけは「お出まし、御出門」です。よっぽど長いご旅行のときには下の方まで行きますけれど、普段のお出ましだったら二階で。一切、下の方には行

図1

かなかった。御寝所(殿下寝室)の前のホール(二階広間)、そこでお待ちしているの。そうすると(殿下が)えっちらおっちら階段からいらっしゃるから、局から走っても間に合うの。局からどれだけ走ったか!なり振りかまわず、それに当時着物でしょう、「それ!」と階段を駆けあがったか!私どもは絶対に本階段は上り下りしなかった。宮様方だけ。私どもは裏階段から。昔は入っちゃいけないところがいくらでもありましたよ。』

図2

こうした思い出話からは、宮家の生活ぶりとともに、邸内における宮家と使用人の動線がしっかり区別されていたことが見て取れます。しかし朝香宮御家族は使用人といえども気遣いを心がけていたようです。

『午後8時すぎには御候所に皆さんがお集まりになるの。ここが私どもの詰め所になっていて老女さんはじめ待機していると、お姫様の勉強がお済みになるとここへ出て、宮様も調べ物がお済みになった頃にここへおいでになるから、私も候所へいってみなさんお座りになるの。宮様が一番奥に、老女さんからその次の人から私どもから、ずらーっと部屋の隅に並んで座って。すると途中で足が痺れてきたりして、そのうちに立っちゃったりして(笑)でもね、宮様がいろいろ外で聞いていらした面白い話をして下さるものですから、それを伺うのを皆さん楽しみにしていました。』

八畳ほどの部屋に膝をつき合わせて並ぶ様子は微笑ましい光景といえましょう。元侍女の方からは他にも宮家当時の貴重なお話を伺いました。折に触れてこの欄でご紹介していきたいとおもいます。(高波) ◆

図1. 二階広間(昭和8年竣工時)

図2. 本館からの渡り廊下と侍女室(昭和8年竣工時)

*本文は、開館25周年記念『1930年代・東京―アール・デコの館(朝香宮邸)が生まれた時代』(平成20年度)カタログに掲載したコラム「朝香宮家の1930年代―宮家の暮らし」を一部抜粋し補足した。同文章は平成20年7月10日に行った元侍女(93歳)の方のインタビューを元にしたものである。